

---

# 「heartのjoker」

黒澤 蝶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「heart of the joker」

### 【Nコード】

N3915F

### 【作者名】

黒澤 蝶

### 【あらすじ】

転校生、天野時雨あまのしぐれと4人の野獣からなる学園コメディー

## 第1話「転校生」

「マジで？」

200×年 4月

高校3年になった俺達は教室にいた

普通の学校、普通のクラス、その中の普通のグループ

何気なく毎日は過ぎていく

平和だと、俺は思う

しかし、平和は長くは続かない、ちょっとした事でいとも簡単にそれは崩れた

あるいは、始まった

今日から、3年という事で俺は三階教室に向かった、二年の時は何故か四階だったので、楽になった

まあ別に階段の1つや2つ増えた所で変わりはありませんが…

「よー、おはよー」

教室に入ると、竜貴が俺を待っていた、俺より早くに竜貴が教室にいるのは珍しい

「んお！はえーな竜貴…」

俺は大袈裟に驚いて言った

「まあ、たまにはね、それより聞いた？」

「えっ何を？」

「実は今日さ…」

「えー！！！！そんな事が！！！！？」

「まだ何も言っただけよ…」

「スマン、スマン…早く言え」

竜貴は咳払いをして言った

「実は今日さ、転校生が来るらしいんだ」

「マジで？」

「先生に聞いたんだ、女だって」

竜貴は少し興奮気味に話した

「女か、まあアユ先生より魅力があるとは思えんが…」

俺は言った、アユ先生とは、二年の頃の担任で、三年になっても俺達のクラスの担任になるらしい

ぶっちゃけ竜貴達と同じクラスになるよりアユ先生が担任になった時の方が嬉しかった

いや、竜貴達とも一緒のクラスになれて嬉しかったけどもね

すると教室のドアがガラリと音をたてて開いた

STまではまだ時間があるので先生では無い

「おう、今日転校生がくるんだって？」

挨拶も無しにそう言ったのは昭一郎だ

金髪に薄い眉、一見すると不良に見えるが、話してみるといい奴だ

「らしいね、可愛いのかな？」  
俺は昭一郎に言った

「可愛いかったら、俺の色気で落としてやるぜ」  
昭一郎は顎に手を当てて言った

「はいはい」

竜貴は呆れた顔で言った

「そついえば卓也は？もうすぐST始まるぜ？」

「遅刻だー！！」  
勢い良く階段を駆け上がる、彼は前田卓也、寝坊をした彼は朝食も取らずに教室へ急いでいた

「あ、あの？」  
突如女の子から声がかかる

「ああ！？」  
卓也は急いでいたので言葉が雑になった

「いや、急いでるなら…いいです」

と女の子は言った

「そう、ごめんな！」卓也はそのまま急いで階段を駆け上がった

「迷っちゃったわ…どこかしら？三年の教室は…」  
女の子はしばらく二階をうろついていた

「ギリギリセーフ！！」

教室のドアを勢い良く開けて卓也は言った

「アウトよ、前田君？」

アユ先生がニコニコしながら言った

「進級初日に遅刻とはいい度胸ね」

「すみませんでした！」卓也は深々と頭を下げた

「まあ、いいわ早く席に座って…」

とアユ先生は言った

「先生、転校生は？」と俺は聞いた

「そうそう、今日転校生の女の子が来ます」

アユ先生がそう言うのと教室は賑わった

「はい！静かにして！その転校生ですが…何故か教室に来るまでにはぐれてしまったので…ち、ちょっと待ってて！先生探してくるから！」

アユ先生は教室を出た

「転校生…？ひょっとして…」

卓也は言った

「ん、どうしたのかな？卓也君」

俺は聞いた、ちなみに普段は君は付けない

「さっき、二階で見慣れない女の子に会ったけど、その子かな？転校生って」

「可愛かったか？」

突然昭一郎が出てきて言った

「いや、全然見てなくて…」

「ちっ役に立たねーな、前田のクセに！」

昭一郎は言った

「それ酷いわ〜昭一郎君…」

卓也は言った、いつもの掛け合いだ、どうやら役に立たないと言われた事は気にしていならしい

「なあ、涼馬？」

竜貴は口を開いた

「ん？」

「俺達も探しに行こーぜ！アユ先生に任せてたら1時間目終わっち



まう……」

「ま、そうだな……行くか……」

俺はわざとダルそうに席を立った

「どこ行くの？涼馬、竜貴？」

昭一郎は聞いた

「転校生を探しにな……」

俺はダルそうに答えた

「おつ俺達も行くぜ、なあ卓也？」

昭一郎は卓也を向いた言った

「行つてらっしゃーい……」

卓也は手を振った

しかし、強引に昭一郎に引つ張られ、結局4人全員で転校生を探す事にした

## 第2話「すれ違い」

転校生が来るらしい

しかし、転校生は先生と教室に来る途中ではぐれたらしい

先生も気づけよ…

まあ、そんな訳で先生だけに任せるのは不安だ

故に俺達も転校生を探す事にした

「卓也隊員！特徴は？」

と俺は聞いた、転校生に会ったのは卓也一人なので、転校生を見つけたとしても、卓也しかわからない

まあ、今は授業中 一時間目はホームルームに今日は設定されているので、教室にいないのは俺達と転校生くらいだが…

「ん…わからないであります！隊員！」

「豚め！！！」

俺は卓也に平手打ちした

「ぶっ!!」

卓也はの頬から パンツと大きな音がして、卓也は崩れ落ちた  
大体、卓也はこんな扱いを受ける、相手は主に昭一郎だ

「何階で会ったのかも覚えてないのか？」

「確か二階だった」

「よし！行くぜ!!」

## 二階

転校生の女の子は三年の教室を探していた

「あれ…三年の教室って二階じゃ無かったっけ…一階かなあ」  
女の子は一階へ

「うつしやあ！二階に着いたぞ!!」

昭一郎が騒ぐ、頼むから静かにしてくれ、他は授業中なんだ…

「二階はやけに空き教室多いから手分けして探すぞ！」

竜貴は言った、空き教室にいつまでもいると思うか？

それより転校生も転校生だ、他の学年の奴らに教室の場所聞けばいい

いのこ…

「よし！俺は一階を探す！！俺と組みたい人〜」  
と俺は言う

「……………」

誰も挙げず、皆は二階を探す

「あれ、無視？お笑いの基本？」

仕方なく俺は竜貴を引っ張り一階へ

一階

「あ、天野さん」

アユ先生は転校生の天野を見つけた

「あ、先生…どこにいたんですか？」  
天野は聞いた

「三年の教室は三階よ？行きましようか」

「はい」

天野と先生は三階へ

「竜貴君、竜貴君…」俺は竜貴に呼びかける

「何かね？涼馬君…」

「私は今、死を覚悟している…」

「奇遇だな…拙者もでござるよ……」

俺と竜貴は勢い良く階段を飛び降り…

跳びすぎた…

俺と竜貴の目の前には…

見回りの先生が…

「あああああ！…！」俺達は叫ぶ

「（。（）あああああ！…！…！」

先生

ドオオオン

「さらばだ…先生…」

俺達は倒れている先生にそう言って、転校生を探した

二階

「いねーな」

昭一郎は空き教室を探している

空き教室にいるわけないが…

転校生を探してもう15分、さすがにもう教室にいるだろうと卓也達は二階の最後の空き教室に手をかけた

「これが最後だ…」昭一郎は言った

「よし、行くぞ！」

ガララ

空き教室を開けた

そこには

見てはいけないものが…

「x@&amp;¥#\$?」

冒険の書1は消えてしまった

冒険の書2は消えてしまった

冒険の書3は消えてしまった



卓也達は記憶を消され、三階の教室にいた

「あれ…俺達はいったい…」

そこでは、転校生の紹介がされていた

「今日からこの学校に通う事になりました、天野 時雨 ですどうぞよろしく」

パチパチパチパチ

教室から拍手がなった

「じゃあ、適当に空いてる席に座って」アユ先生は言った

「えっと…」

空いてる席…空いてる席

二つ空いてるが…

ここでもいいか

「あ、涼馬の席…」

卓也はそう言おうとしたが…  
転校生は既に座ってしまっていた

一階

「いないなあ…」

俺と竜貴は転校生を探し続けていた

### 第3話「七不思議」

学校の七不思議…

一つ、音楽室のピアノは夜になると勝手に鳴りだす…

二つ、四階の空き教室のロッカー…それは人食いロッカーである…

三つ、美術室の鏡は異世界と繋がっている…

四つ、理科室の人体模型は夜中になると学校の見回りをはじめ…

いつ…「いやあああああ！！！！！！！！」

転校生 天野 時雨の声だ…

天野が転校生してきてから四日、席が近い事もあって俺達四人とはなかなか仲がいい

その前に自己紹介をしておこう

まずは、木下 竜貴から

木下 竜貴

通称 そよ風の竜貴

その昔、暴風警報が発令されても学校にやって来た事からこのあだ名がつけられた

伊藤 昭一郎

通称 腰痛の昭一郎

高三で腰痛に苦しめられている事からつけられたあだ名だ

前田 卓也

通称 ハニカミ卓也

不良五人にかつあげされても次の日ハニカミ続けた事からつけられたあだ名

そしてこの俺、佐藤 涼馬

通称 花壇の涼馬

四階から転落し、花壇にあった花に助けられてから毎日花壇の花に水をやっている事からつけられたあだ名だ…

あれは痛かった…

あとは天野か…

天野は青い髪でなかなか明るく可愛い奴だ

身長 160センチ

体重 44キロ

バスト…ぐはっ 殴られた

とゆう訳で自己紹介終了

次回もお楽しみに

「もう！？　これからお化けとか倒すんじゃないの！？」

卓也からのツッコミが帰ってきた

自己紹介にはつつこまんらしい

面倒臭くなってきた：

「これ以上文字も続かんし俺は帰るよ」

「いや、わけわかんねーから」

竜貴も俺をつっこむ

今日は俺はボケらしいな、よし！ とことんボケてやるぜ！

「いや、今日のお話は七不思議だし、俺が出る番ぢやないかな？って思って…」

「ぢゃって何だ？ ぢゃって」

竜貴は俺をつっこむ

「使い方が違うのぢゃ！」

昭一郎は言った

「オメーもちげーんだよ！ ってつっこんじまった！ 昭一郎の思っツボだ！」

「それより今日の話に戻ったら？」

天野は言った、そうだった忘れてた

彼女がいなければとんでもない方向に話が進むところだった

「そうだ、そうだ…天野が叫んだところまで行ったんだっただ…よし！ 叫べ！」

「いやああああ！！！！！！！！」

天野は叫んだ

今日俺達は七不思議の話で盛り上がっていた

天野はお化けは苦手らしいな…

「ねえ、涼馬ビックリマークの数、あれで合ってたかしら？」

「いや知らねーよ！　なんだてめーら！？今日は俺がポケじゃねえの？　この調子でポケられてみる！　嫁に行けなくなるよ！間違いないく！」

俺は言った

「お前女ぢやないから」  
竜貴は言った

「だから！　ちゃって俺が最初に使ったんじゃねえの！？　何使ってんのよみんなポンポンポン！　使用料を取りたいよ！」



「まあまあ、とにかく夜にらん事には話は始まらん！」  
卓也は言った

その通りだ、お化けと言えば夜

俺達は夜に学校で待ち合わせる事にした

夜中の十一時、学校

俺は一人待ちぼうける…

「こないなあ」

夜の風が身にしみた

第4話「異世界の鏡」(前書き)

.....ふう

## 第4話「異世界の鏡」

「遅ひ!!」

俺は遅れてきた竜貴達四人に言った

「いやすまん、実はなかなかアニメが面白くて…」  
卓也は言った

「てめええ! アニメ!? 感じる事多き年頃の僕を四十九分ほど  
放置してアニメ?」

「俺もアニメを見ていてな…」  
竜貴は言った

「何なんだよ! 何のアニメなんだよ タイトルを知りたいよ!」  
激しくつつこむ、寒さを忘れるほどに

「今流行りのアニメ、中宮 アベシの空腹を……な」

「何だそのタイトルは!? 製作側のやる気の無さが垣間見えるよ  
!」

「俺はレスラー 消臭 力の試合を見ていてな、ビデオにも撮ったぞ！」

昭一郎は言った

「お前もテレビ観てたのかああ！ ていうか録画したならいいじゃん！ 来ようよ学校に！」

「私は虹色の河童に追いかけてて……」

天野 時雨は言った

「大嘘言つてんじゃねええ！！ 何！？ 君は、河童？ 虹色の？ もはや学校の七不思議より凄いじゃん！ 探しに行こうよ今から！」

俺は全てにつっこむ

そろそろ疲れてきたので話を進める

学校の七不思議を解き明かそうと俺達は夜の学校に忍び込んだ

一階

「まずは一階からだな……一階に何かあるかい？」

竜貴は天野に聞いた、天野はみんなから集めた七不思議の噂についてまとめた紙を見た

「ん…と、一階は……あつ！ 異世界の鏡がある美術室は一階よ！」

「よし！ 行こう！」

卓也は言った

異世界：なんだそりゃ？ と思いながらも少し興味は出てきた

美術室

「これが美術室か…あれ？」

「どうした？ 昭一郎」

俺は昭一郎に聞いた

「灯りがつかないんだけど……」

……嘘だろ？

「いや、昭一郎君悪ふざけはいけないよ！ ちゃんと懐中電灯確認したからつかない筈が無いよ！ 有り得ないよ！」

「いや、だってマジでつかねーもん！ やってみ？」

昭一郎から懐中電灯を渡され、俺はスイッチをつける

カチッ　カチッ　カチッ

……

……つかねえ

うおお！マジで焦ってきた！あれ？　何だこれマジでつかねーぞ？

「あつ！でも大丈夫よ！　私もライト持ってきたから」  
天野はライトで部屋を照らす

「なら、まずは鏡を調べようか」  
竜貴はそう言くと　ライトを天野から受け取り、鏡を照らした

鏡はどこも変わりはない……　まあ暗い部屋で鏡だけをライトで照らしたら相当に怖いが……

「んっ？鏡に映ってるあの絵…」

卓也は鏡を指差して言った

「ど、どうした？卓也…」

俺は冷や汗をかきながら卓也を見た

「鏡に映ってるあの絵……この部屋に無いんですけど…」  
卓也は言った

俺達は恐る恐る振り返る

…無い

……無い

………無い

「はっははは……」

俺達は再び鏡に振り返った

すると鏡の先には絵を描いている学生の姿が！

「うわああああ……！！！！」

俺達は一目散に美術室を出た

「ああああ……！！！！」

自己プロデュースもへったくれも無い

大急ぎで俺達は学校の門にたどり着いた

「何なんだ！？ 何なんだよあれは！？」

卓也は慌てて聞いた

「し、知らないわよ私はあ……！！」

天野も言う、しゃべり方にいつもの落ち着きが無い

無理も無いが……



## 学校の門

やたらと高い学校の門に俺達はたどり着いた

「早く開けてえ！」

天野は門を開くように言う

「待て！ 俺：閉めてねえよ…」

俺は確かに門をわざと開けっ放しにした  
すぐに逃げ出すためだ

「だ、誰かが気づいて閉めたんだきつと！ ははは…早く出ようぜ？」

昭一郎も焦っている

門を開けて学校を出た俺達は二十四時間営業のファミリーレストランに入った

とにかく明るい所に行きたかったからだ

「……………で！ あれは何かね？」

俺は皆に聞いた

「知るわけないだろ！」  
竜貴は言った

「異世界の…先？」  
天野は言った

「ま、まさかあ…」  
卓也はそう言うが、確かに部屋には無い物が映っていた

「ご注文はお決まりですかー？」  
やけに明るい店員が俺達に注文を聞きに来た

「あついえ…まだ…」  
俺は言った

「あー！ お姉さんの格好 中宮 アベシの空腹のアベシの格好そ  
つくりだ！」  
卓也は言った

「恥ずかしいから止めてくれ…卓也君 すみません店員さん、また  
後で…」  
竜貴は言った

「はい！　かしこまらっ　すみませんかしこまりましたー！」

……　かんだな

「さっきのかみ方もそっくりだったな」

卓也はお姉さんを見て言った

「……　ちよつと気になったんだが…　ここのレストラン、アベシが働いてるレストランにそっくりじゃないか？」

竜貴は言った

俺達は一目散にこのレストランに駆け込んだので、ここが何町のレストランなのか知らないが、竜貴に言わせるとそっくりらしい

「そつえば、こんなシーン見たことあるぞ？」

卓也は言った

「……　ちなみにどんなシーン？」

天野は聞いた

「第四話の「ドキッ　アベシのアルバイト」の話さ、アベシのバイトでいきなり強盗が入ってきて…」

卓也はペラペラと説明を始める

「…で！ 謎の男女五人が強盗をぶっ倒して、何も名乗らずに去って行くっていう…」

「……………」  
「……………」

すると突然レストランのドアが強引に開いた

「コルアアア！！てめえ等！静かにしろお！そしてその店員！金をだせえ！」

強盗がやって来た  
数は一人

「……………」  
「……………」

「おほっ！原作そっくりだ！」  
卓也は言った

「あゝこれくらいでいいですか？」

「てめえーコルアアア！こんなんで足りると思ってんのか？てめえコルアアア！俺はなあ！結婚資金が欲しいんだよてめえコルアアア！ 何！？お前！五百円！？ 結婚資金五百円？ デートもでき

ねーじゃん！てめえコルアア！」

「あわわわ…ご、ごめらっ…いや、ごめんなさい」

「ちゃんと謝れええ！ 見たことねえよごめんなさいでかむ奴！  
もういい！てめえは人質だ！ 店長を呼べええ…！」

「はっ！店長！助けてくだわっ…助けて下さい」

「かむなああ…！」

「……………」

「……………」

「おおっ！ますます原作にそっくりだ！このあと謎の五人が強盗を  
倒すのだ！」

卓也は興奮気味に言った

「天野さん、天野さん」

俺は言う

「言わなくてもわかるわよ…涼馬」

「あれ…だよな」

「あれね…」

「いゝかげんにしろお店長コルアア！ 俺はお前 この度は結婚資金が欲しいってんのに！ お前も五百円！？お前達二人の金銭感覚はどうなってるワケ？」

「店長」

アベシは言った

「ああああ…！！！！！！！！」

俺と天野と昭一郎は竜貴と卓也を引っ張り、走った

「ん？ 何だ！？てめえら？コルア……」

「うるせえええ！！！！！！」俺は強盗をリアートで倒した

強盗は宙を舞い、一回転して地面に激突、気絶した

「あ、あのあなた達は…」  
アベシは聞いた

「あああああああ……」

俺達は何も言わずにレストランを出て学校へ走った

「あ、あの……どうもありがとう……ああ……くそっ………かんだ……」

学校

「良く見ると学校も違ってるな……」  
昭一郎は言った

「美術室に行けば現実に戻れるはずだ……」

俺は言った

美術室

「よし！ 行くぞ！」

「せゝの！」

俺達は鏡に突っ込んだ

ガシャアアアン

凄まじい音とともに鏡は割れた



## 番外編「アベシの空腹」

「中宮 アベシの空腹」

「第1話 うほ アベシの早弁」

アベシ「はい私アベシ、高校受験に五回落ちて六年目でようやく合格したよ！ あと現在六百万円借金のある普通の女の子だよ」

アベシ「やあー私は今一時間目の授業を受けているところだよ それにしてもお腹が空いたわー」

謎の男「駄目だよアベシちゃん！ またお昼にお腹がすいて倒れちゃうよ」

アベシ「モグモグ…ん？」

謎の男「もう食ってるー！ 流石はアベシちゃんだ！ 僕が喋ってるほんの数秒の間にこんなに……てコラー！ 食べちゃ駄目って言ってるじゃないか」

アベシ「もゝうるさいわねゝ！ この気持ち悪いネズミの顔をした  
デカい男は ひがしほうもん 東妄門 ゆきまろ 雪麿 その昔私がムシヤクシヤして描いた魔  
法陣から出てきたの、そして私と一緒に高校に受かったわけ」

アベシ「あゝあお弁当食べちゃったわ……ねえ雪麿、何か買ってきた  
なさいよ」

雪麿「いやだよ！自分で買いに行きなよ、アベシちゃんがこうして  
早弁する度に買い物行かされてたんじゃもう僕授業数が足りなくな  
るじゃないかあ！！！！」

アベシ「しかたないわね……じゃあ雪麿のお弁当でいいわ、それよこ  
しなさいよ」

雪麿「冗談じゃないよアベシちゃん！いいかい？アベシちゃんのお  
弁当も僕のお弁当も今朝僕が早起きして作ったんだよ？それにア  
ベシちゃんのお弁当は僕の倍……あー！！！！食ってるう！！！！」

「第二話 アラ アベシと痴漢」

女性「きゃあ！この人痴漢です！」

男性「ち、違う！僕じゃない」

アベシ「この電車は痴漢が多いわねー　ちよっと！雪麿アンタ少し離れなさいよ！」

雪麿「いや、僕じゃないよ！　アベシちゃんそれに何！？そのゴミを見るような目は？」

アベシ「当たり前じゃない、日本の痴漢の一割はアナタでしょ？」

雪麿「ち、違うよ！冷静になって考えてみなよ！　この東京だけでも一体どれくらいの人が電車に乗ってると思ってるんだよ！僕じゃないよ」

アベシ「気持ち悪いから私は女性専用車両に乗ることにするわ」

雪麿「お願い！置いてかないでよアベシちゃん！　僕みたいな顔だけネズミのムキムキ男が一人でいたら完全に浮いちゃうじゃないかあ！ー！」

アベシ「しかたないわね、じゃあ今日だけは一緒に学校に行ってあげるわ」

雪麿「あ、明日からは来てくれないんだね……もう死のうかな……」

ピッ

俺はテレビのスイッチを消した

「つまらねえ……」

## 第5話「移動」

ここは、卓也の家。

いつもの奴らが、いつものように集まっていた。

「なあ…お前ら、何で用も無いのに家に集まるんだ？」

この部屋の持ち主の卓也は言った。

「俺はお前の家のお菓子が目的だ」

高校一の糖分王、涼馬が言った。

「お菓子って…お前この前も俺の クランキー Wチョコナッツを  
食べたじゃねーか！」

「あ、お菓子があるのこの棚？」

「あ、てめ… クランキー Wチョコナッツが…」

卓也が言いきる前に、涼馬はクランキーをザクザクと食べ始めた。

「最後の一個だったのに…… で？あとの三人は？」

「俺はお前の家のアニメDVDが観たくてね」

竜貴は言った。

「自分の家で観ろお！ 何故俺の家で観る!？」

「私は……………虹色の河童に追いかけて…」

「嘘をつくなああ!! いてたまるか! 虹色の河童なんぞ」

時雨の答えに対して、卓也は言った。

「で？ 昭一郎は？」

「お前に…会いたくてな…」

「人の漫画読みながら言う台詞じゃあないよね…。 よそっか、漫画のカバーを外すの」

卓也は立ち上がって言った。

「よく聞け！ お前ら対した用も無いのに家に集まるな！ 迷惑な

んだよ！ ……って涼馬、カーペットで手を拭くな！ 竜貴もDVDをバラバラに並べるな！ 昭一郎はカバーと漫画に分けるのを止める！」

「ニャー」

「ミケ！ 鳴くな！」

「これ、卓也の家の猫よ？」

「ち、うるせーな……出てけはいんだろ、出てけば」

涼馬達は愚痴りながら卓也の家を出た。

「……ったく、やっと出ていったか……」

卓也はほっと胸をなで下ろし、DVDを手にとってプレイヤーに入れた。

「やっぱりアニメは独りで観るに限るね」

しかし、次の日

「あのさ…何で学校帰りに俺の家に寄るわけ？」

「早弁したから、お腹が空いてな…あっ！クランキー　アイスナッツだ」

涼馬が冷蔵庫を開けて言った。　そしてクランキーを食べた。

「勝手に冷蔵庫を開けるな！」

「ニャー」

「ミケ！鳴くな！」

こんな調子で卓也は、毎日家にあがる涼馬達に迷惑していた。

そして、卓也は決意した。

深夜の学校の美術室

ここは、以前七不思議の時に来た場所だ。  
だが、夜になると異世界に行けるらしい。

昼はなんともない場所



「…俺はこの先にいる、アベシの家に…」

卓也は鏡の前に立った。そして、助走をつけて飛び出した。

「行くんだああ！」

卓也は鏡に突っ込んだ。

ガッシャアアアン

鏡は割れた。しかし、移動は成功したらしい、何故なら美術室の物の配置が全然違っていたからだ。

「お…俺は…アベ……シの…家へ…」

血だらけの卓也は、這うようにして美術室を出た。

しかし、卓也は直後気絶した。予想以上に血を流し過ぎたためだ。

「あゝ、ノート忘れちゃったわ！　　ったく雪麿の奴、私にノート見せてくれないんだもん！」

アベシが自分のノートを取りに学校を走っていた。

「全くう、夜の学校は怖いわ…何か出そうな雰囲気ね…ん？」

アベシは何かを踏んづけた。容赦もなく、全体重を乗せて。

「ぐえええ！…！」

気絶していた卓也は叫んだ。

「きゃあ！ ぐ、ごめんなさいい」

「はっ！ 気を失ってた… どの誰か知らんがありが…あー！ アベシ！」

卓也は体を起こして言った。

「えっ… 何で私の名前を… あっ！ 強盗を倒した人！？」

続いてアベシが気づいた。 どうやらアベシは前の事を覚えていたようだ。

「このあいだはどうも」

アベシは、以前強盗から助けてもらった事に礼を言った。

「あつ、いえいえ…ところで何で学校に？」

卓也は聞いた。 聞いた所で間違いに気づいた。 何で学校にとは、アベシが聞く事であって、卓也が聞く事ではない。

ここは卓也の学校ではなく、アベシの学校なのだ。  
鏡を通じて、卓也はここに来た。

「私は、忘れたノートを取りに… あなたもこの生徒だったの？」

アベシは聞いた。 卓也はこの生徒ではないが、何故いるのかと質問されたら、回答に困ってしまう。 仕方がなく卓也は嘘をついて乗り切る事にした。

「うん、俺もこの生徒なんだ、七不思議を解き明かそうとしててさ…」

「ふーん、七不思議ねえ… 手伝いましょうか？」

「えっ… ああ… お願い… します…」

（エライ事になった…）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3915f/>

---

「heartのjoker」

2010年11月27日20時19分発行